

十八世紀前半の学問受容と闇齋学派の役割

—佐藤直方とその門人の活動を通して—

綱川 歩美

はじめに

日本において儒学が最も広い範囲で、関心を持たれた時代として近世をあげることには異論がないであろう。明確な体系を持たない諸意識の段階にも、儒学的知識の片鱗をみてとることができ。近年、こうした思想や知識の広がり、意識的に盛り込んだ研究に、書物や出版の研究がある。そこでの知識は儒学に限らないが、書物や出版、またそれらに関わる人々を通じて、思想や知識の広がりや様々な局面で捉えようとする。書物という文化資本の再生産を通して、具体的な社会・人物への思想の着地を見る方法として重要である^①。特に内容の公開を前提とする出版物は、民衆世界までを射程として浸潤する可能性を持っていた^②。この点で史料上に見えにくい民衆の知・意識に迫る、文化史研究としても魅力的である。

こうして思想や知識の受容の問題の多くは、民衆の広がり、通俗化を意識するなかで深化されつつある。知的媒体として出版物は、簡便性を追求しつつ均質的に広がる知識の蓄積を映す鏡としての性格を持つ^③。それは近世社会の文化的状況の一面を示している。だが一方で、儒学を中心とした高度な専門性を持つ思想群の蓄積も近世社会の一面である。こちらは広がり、通俗化の勢いには勝りようがないが、内容の公開・非公開という条件の影響を部分的にうけつつも、社会の中で確実に受け継がれてきた。

もちろん、文化の質としての両者は容易に区分できるものではなく、実際の人間が介在する以上、つねに振幅のある流動的なものである。しかし、近世社会において儒者と認識されていた人々の存在は、知識の内容による階層性が意識されていたことを表していることには違いない。儒者とは専門的な知識を扱うために、そう認識されていたからである。より専門的な思想の展開は、「モノ」としての書物よりも人的関係が中心であつたはずである。また知的階層の維持は、高度な体系へ接近しようとする人々の意志の継続でもある。ここで問題とするのは突出した個性と能力を発揮し、時代の先端をいく思想家というよりも、その周辺に自らの学問環境を構築する人々のものである。しかしその意思と行動の展開の様子の説明はまだ十全とはいえない。

多かれ少なかれ変化を伴いながら、人から人へ広がっていく知識や思想のあり方は、書物によるそれらの普及を根底で支えるものである。そして十八世紀後半以降に認められる「儒家的知」^④の拡大状況につながる前段階を考える論点になりうると思う。つまりは、知識の簡便さを求める流れの一方で、思想の核心部分につながる人々の意識と行動を考えることである。

そこで、読書行為や出版文化の考究から浮かんできた儒学的知の普及の構図を意識しつつ、人的な繋がりが大きな要素である、儒学思想の受容過程を明らかにしていく必要がある。具体的には朱子学や「闇齋学」「徂徠学」という、体系的な思想に関心を持ち、その影響下で個々の主体が思考し展開する様相を、歴史的な文脈に置いてみることである。それは、ハイカルチャーの再生産の過程でもある。こうした過程を通じて、専門性を有する儒学思想を個々の現実に即して社会的に位置づけてみたいのである。

さて、山崎闇齋（元和四〜天和二）（一六一八〜一六八二）とそ

の一派は、近世日本における朱子学の深化、本格的受容の基点であるとされてきた^⑤。その意味で高度かつ体系的な思想群の受容を体現していると考えてよい。この門下をして、門人数千人という巷説の存在を見るならば、この門下に展開される様相は材料として不足はない。ここに思想の拡大再生産の過程を明らかにするに十分な対象である。

本稿では崎門の師弟間における学問的活動の諸相と展開を、書状を中心に考察する。対象は、佐藤直方（慶安三〜享保四）（一六五〇〜一七一九）とその門人たちの関係である。本稿で門人というのは、さしずめ直接的教授関係に限定して論を進める。対象とする史料は、正徳五（一七一五）年から享保四（一七一九）年の間に、佐藤直方が門人に与えた書状が中心である^⑦。

一・佐藤直方と門人たち

（一）手紙の宛先

直方の手紙の宛先は次の三名である。まずは長谷川克明（生没年不詳）、源右衛門と称す。川越から古河、そして隠居後は吉田藩七万石へと転封した松平信輝の家臣で、三〇〇石取りの上級家臣である。吉田藩の分限帳に享保五年から役付きで登場し、後に「中老」になる^⑧。享保元年九月七日から同四年七月二十七日までの計十四通が残されている^⑨。

二人目は永井行達（誠之）（元禄二〜元文五）（一六九〇〜一七四〇）。号は淳庵・隠求、三右衛門と称する江戸の人で医者の方である。書状は正徳五年十月八日から享保三年十二月二十八日までの計三十三通で、三人のうち最も多い^⑩。

最後は稲葉迂斎（貞享元〜宝暦十）（一六八四〜一七六〇）である。名を正義、通称は十左衛門（重左衛門）。江戸に住まい、唐津藩主・土井利実に仕え藩儒となる。書状は、享保三年五月二十五日〜享保四年四月二十三日までの計十五通である^⑪。

（二）直方の動向―書状の背景―

手紙の書き手である、佐藤直方は福山藩の下級武士の家に生れ、同藩主・永田養庵に従い上京、闇齋に学ぶ。

元禄四（一六九一）年、福山藩主・水野勝種の招きで江戸へ行くが同六年には致仕して浪人。元禄七年、前橋藩主・酒井忠孝に招かれ、賓師となる。宝永二（一七〇五）年、忠孝の上洛にともない随行。その後も諸々の大名から賓師の待遇で招かれ講義をおこなう。この間ほとんどを江戸の酒井家藩邸の一角に居住していたようである^⑫。

享保三年七月十六日〜閏十月二十五日まで京都方面遊学にでる。行程は、江戸↓彦根↓京都↓長島↓名古屋↓吉田↓江戸で、各地で藩や門人に迎えられたことが書状からも窺える。帰府後も精力的に講義を行い、同四年八月十四日、講義中に倒れ翌十五日死去する。書状は、江戸に居住するようになってから、西国方面の遊学をほとんど死の直前までの期間に及び、遊学先からのものも含んでいる。

二・書状からみる教導のありかた

（一）講釈の形態と場

では、師弟間の学問の場、直方の講義・講釈はどのようにして展

開されたのだろうか。その断片を拾ってみる。

まず講義の形態である。「今日八増山殿へ参候」(永井宛/享保二・十二・五)¹⁵とか、「明日は佐藤求馬殿江参候」(長谷川宛/享保三・十二・三)とある。講義のために直方自身が相手方へ出向いている事がわかる。

さらに、「来十三日加藤清左衛門へ参候、御隙入無之候は、御同道可申候」(永井宛/正徳六・二月)とか、「明後七日、八左衛門殿江参候筈二候、永井氏も参候、軍治・十右も可参候」(稲葉宛/不明)とあるように、出講先へ他の門人を同道したり、参集させたりしている。このような形態を彼らは「講会」と呼んでいる¹⁶。

闇齋学派では、対面による師の講釈が特徴とされ、修学の方法として重要な意味をもっていたが、その場は私宅など一定の限定された空間であった。「講会」と彼らが呼ぶものも、その一類型であろう。おそらく十八世紀のはじめにおいては一般的な形態であったであろう。儒学を学ぶにあたって私塾や藩校などのいわゆる学舎に集う儒学教育とは異なるものである。

しかし人々が集まれば、学問以外の情報も交わされることが予想される。例えば直方の西遊中、野田剛齋を中心に「講会」は行われていたが、そこへ直方は手紙を送り、三宅観瀾や谷秦山の死去を知らせている。おそらく京都の三宅尚齋の周辺で見聞きしたと思われるものをいち早く伝えていく¹⁷。

また、享保四年に長谷川に送った七月四日付の書状で、門人のひとり駿府代官・守屋助次郎の扶持放しを話題にしている。扶持放しの理由は、負臈の償いが滞っていることであったが、直方は「勘定延引二付御扶持被召放、珍敷浪人二被成候、笑止之事二候」と冷ややかである。幕府の処分言い渡しから半月ほどで、こうした情報が書状を通じて対面の「講会」の場で話題になり、またその逆も想定

できよう。

さて情報の伝達のほかに、対面講義と比べて書状にはどのような学問的な意味があるのだろうか。

長谷川宛てでは、「御気色之様子承無心許存候、気力之労と存候、御在府中急逞勤学之故にて候也」(享保二・十一・晦日)と、体調を気遣い学問に熱心過ぎるためとしている。一方で、永井へは「鳥獸にも三魂七魄合点不参候、御吟味可有候、自加藤清左之一封遣申候、心事明日可申承候」(享保三・七・七)とある。「鳥獸」にも人間同様に魂魄があるといった永井の解釈の不十分さを指摘し、再考を促している。

藩士の長谷川はこれ以降、役職に就き、藩の中樞を担っていくことになる。第一義的には藩士である長谷川に対しては、全体的に踏み込んだ学説よりも、読書や学問の仕方についての内容が多い。また長谷川と直方、双方の妻子の親交も文面に表れ、家族的つきあいの様子が目立つ。儒業を専門とする必要のない、人物への対応と考えられる。

それは、稲葉迂齋へのものと比較するとより顕著である²⁰。

^{士井利実}大炊頭様御勇健、長崎江も被成御越候由、御学意不絶、近思録相濟孟子御講習可被成候由、旁珍重存候。御家中信従之徒数多有之候由、何卒父母生付候外之本知少二而も開候様御導キ可有候、カシコウナケレバ無用之贅物而已二而候。(享保三・五・二十五)

すでに唐津藩儒として活躍していた稲葉へは、藩主をはじめ家中の学意盛んな様子をうけて、よく導くようにと励行の言葉が述べられている。

このように、書状では学問の問題点・論説の質疑応答・学問指導の在り方など、門人別個に対応した意見が示されていた。それぞれの学問の段階や状況に個別に対応した指摘を与えている。

だが先の永井宛の中に、庄内藩士・加藤清左衛門（主令）から直方宛での書状を回覧させるということがあった。こうしたことは例外ではなく、「源右衛門より之書付一覽も面上ニ可申談候、尤不及御返書候」（享保三三・三三・一）と、別の書状も閲覧させている。ここでは一対一で交わされる手紙が、第三者にも開示されている。一見すると書状の個別性を薄めるようにみえるが、こうした点も含めて門人の学習段階と位相を踏まえた個別的な対応と考えられる。それは、以下に述べるように、直方が門人全体に訴える共通の課題に照準が向けられた上でのことだからである。

（二）直方の「教え」の内容と反応

○「朝聞道夕死可矣」の意味

直方が、手紙の文面上繰り返し用いる文節がある。

今度方々歴行、余程心付出来候事共有之候、とかく事理ヲ明白ニスル方ニかいなく、自家ノ存念ヲ本ニ立テ事ニ接リ候故、シヤクシセフギニ成申候、理ハ自然ノ物ナレバ、事理ニゆがミたる事ハ無之候、自家の権度がタガヒ候カラ色々ノまどひ、憂、喜怒も出申候、朝聞道而夕死ノ章ノ皆實理也しが、ソレヲヤタルものニ候、アチハ實理ナレバ、コチノ心ヲ正フシテカ、レト云事ニ候。（長谷川宛／享保三三・閏十・二十四）

享保三（一七一八）年、西遊を終えて出会った人々への感想であ

る。誰も彼も「事理ヲ明白ニスル方ニかいなく」、絶対的な理に従って物事を判別することをしないで、「自家ノ存念」を優先させるために「色々ノまどひ、憂、喜怒」にとらわれてしまう。みな「實理」を離れているという。

繰り返すのは「朝聞道而有死ノ章」である。三人への書状のなかでも頻出する。これは「子曰、朝聞道、夕死可矣」という『論語』「里仁第四」の一部で、朝に「道」を知れば晩に死んでもよいという「道」への態度を問題にするものである。朱熹の『論語集註』では「道ハ者事物当然之理、苟得レハレ聞コトヲレ之ヲ、則生テハ順ヒ死シテ安ク、無シニ復テ遺恨ニ矣」と説明し、「道」への近接・体得を至上とするものである。直方も、この一節に言及した『朱子語類』卷二十六に対し、「道ハ只是眼前分明底道理」と「道」の重要性を言う。²¹

心気保養俗務にまぎれず朝夕道を心に不忘、禽獸ニて死せぬ様にと志を引立々々、「浩然之氣」²²堅固に人欲にふみつけられぬ様にと、毎日心付可申事に候（長谷川宛／享保四・二・三三）

直方にとって、「道」の体得とは、道徳的に対極にある「人欲」に克つことであり、「朝聞道夕死可矣」は、人間の本来性へと励ましていく、いわば標語である。

今日吾人何ヤラ苦勞不平頭ヲウナタレテ身ヲウラミ、さても氣のつまる事に候、其あいさつニ出合候事不快ニ候、サラリ／＼トスルコソ世ニスムト云モノナレ、「曾點人欲盡処天理流行」²³ハコ、ニアリ、木火土金水ガ天地ノ間ニ流行スルデ五行ト云ナリ、少モツカヘト、コホル事ナシ、常人ノ心情何カニツカヘト、コホルギ、五行ノ意ニ違タリ。（永井宛／正徳六・一・十）

日常の出来事に不平不満を感じ身上をうらみ、世間との付き合いに不器用なのは、曾點がいう「天理流行」がこの身体に同期されていないからである。そのように「ト、コホル」のは「常人」の「人欲」のためである。

直方のいう克己は、きわめて日常的な次元での実践的態度を問題にしている。そして「朝聞道而夕死ノ章」が目指すところは、「兎角朝聞道夕死可矣合点無之中ハ、俗人ト五十歩百歩、形而下之中ニグツグツシテ居ルト申者ニ候」(稲葉宛ノ享保四 一・五)とあるように「俗人」との差別化であり、「道」を知り学ぶものとしての日常生活の次元からの覚悟を要求するものである。

○「天下ニヲレ一人」

直方の度々発せられる標語に対して門人たちの反応はいかがなものであったか。

拙者(長谷川) ナド氣稟柔弱、只便安ヲ好ミ苦ナ処へ直ニハイリ申候合点無御座候処、甚得省発申候、此所一大事之所にて御座候、此間ふと『朗詠集』見申候ニ付、此哥見付申候、「極楽は遙けき程と聞きしかど、つとめていたる処なりけり 空也上人」、つとめていたると申処、感心之至ニ奉存候(享保四 六・五)

長谷川は、「道」の体得は「つとめていたる」べきと研鑽の必要を実感する。ここに主体的自己の自覚をみることができよう。一方、永井は次のように述べる。

昨日は御講習拝聴難有奉存候、朝聞道夕死可矣ニ昨日之御筆記

帰着仕ルト申所、千万難有御教誡と奉存候、「大率は為未聞者設」ト御座候得は、後世ノ学者ノ為と思召サレ候テノ聖言と奉存候、後世ノ学者ト申セバヨソヨシク御座候、スグニ私タメニ孔子モ被仰タルト奉存候、トカクアノ語ハ天下ニヲレ一人知タト申デナフテハスミ申間敷奉存候(正徳六 七・九)

聖賢の言を通じて「道」を聞くというのは、「大率、是為未聞者設」つまり、「道」を知り得ていない者の為に設けられたものである。永井は、「後世ノ学者ノ為」へ託した「聖言」であるが、孔子が「スグニ私タメニ」向けた言葉のようであると、そこに肉薄したイメージを受け取っている。そして、「天下ニヲレ一人知タト」という自負を、「道」の存在の重さとともに受け止める。「朝聞道夕死可矣」は強烈な個への呼びかけ、一種の啓示として刻まれる。

直方が語った、門人個々の日常的な所作を左右する心の在り方は、「道」を捕まえようとすることで自覚される。主体的自己によって、「俗」ではない自己、すなわち「学者」の養成を目指す。もちろんここでいう「学者」とは、学ぶ者、学問する者としての意味である。こうした人格形成を門人に期待していたことは次のような一節からも分かる。「進学之佳依旧無之候、野田・永井・鈴木先ヅ此三氏にて候、はきくと進出ゆへかしと願申候、何としても年来の染習引ままとわし候事に候」(長谷川宛ノ享保四 七・四)。直方は、いわば近世社会における個の自覚を引き出すことに賭けたのである。

三三 「学者」の位相

直方が、学問(道)に対する態度において共通の課題を門人へ喚起しつつも、書状で見せる個別的な対応との関係をもう少し深く

考えてみたい。というのも、学習段階に応じた個別的対応としての側面のほかに、歴史的性格を加味する必要があるからである。それを踏まえ本章では、門人の学問活動を藩という政治体に即して見てみたい。

(二) 門人の出仕と長島藩

山中武兵衛事、浪人分之趣に増山対馬守殿へ相勤、十人扶持御合力、頃日屋敷へ引越申候、是も痰気ニテ不快ニ候得共、講積は相勤申候(長谷川宛/享保二・十一・晦日)

享保二年も押し詰まったところ、門人の一人である山中剛勝(？)享保四(？)一七一九)が、伊勢長島藩主・増山正任へ仕えることになった。長島藩の地誌『長島志』にも「山中武兵衛 享保二年以儒游于本藩」とある。禄は十人扶持である。おそらく直方が仲介したのであろう。剛勝は病気がちではあったが、江戸藩邸で儒者として仕えることになる。(永井宛/享保三・九・十八)

剛勝を登用した長島藩と増山家について述べておこう。増山氏は寛永二十(一六四三)年、家光側室の実家として、正利の代に取り立てられる。翌正保元(一六四四)年、家綱の誕生をうけて、正保四年には相模に一万石、万治二(一六五九)年に三河に一万石加増で、計二万石の西尾城主となり、正保四年に奏者番を勤める。元禄十五(一七〇二)年、正弥のとき伊勢長島へ移封、そのまま明治維新を迎える。

剛勝を登用した増山正任(延宝元~延享元)(一六七三~一七四四)は、長島藩二代藩主(増山家三代目当主)である。元禄十(一六九七)年、従五位下対馬守に任ぜられ、宝永元(一七〇四)

年に遺領を継ぐ。享保八(一七二三)年奏者番となり河内守へ改め、寛保二(一七四二)年に致仕している。正任自身も直方の講席に連なる門人であった。

増山家の領地伊勢国長島は、中世~戦国期の一向一揆で、長島願証寺と織田信長の抗争の地であった。地理的には、三川(木曾・長良・揖斐)の流れによって堆積した河口デルタ地帯で、堤防に囲まれた輪中である。海抜〇メートル地帯の低湿地である。そのため、「民殆為魚亀」(『長島志』)と形容されるような水害の多発地域であり、正任の時代も例外ではない。宝永四・五年の地震や、正徳元・正徳四年の台風による高潮。享保五・七年の洪水など、正任の藩政時代は、幕府の助成を受けつつ復旧に追われた。

(二) 増山正任の場合―直方の対正任『孟子』講義―

近世自^正吾 大空公^任始崇信^{程朱}之学、斯^文漸勃然、人々稍知^所趣向[、]於是知^下無^三可^レ捨^レ之地[、]無^中不^レ可^レ教^レ之^上民^上。

近世後期の儒者・十時梅厓(寛延二~文化元)(一七四九~一八〇四)は『長島志』において、大空公すなわち正任の時代を儒学受容の漸進期としている。たしかに長島藩で儒者の登用がはじまる時期であり、その評価は妥当であろう。そして正任の儒学受容には直方の存在が大きい。直方の全集『韞蔵録』にはそれを裏付ける史料がある。

「為増山侯講孟子録」である。³⁰ 時期が明記されていないが、正任の藩主時代と直方の没年から、宝永元年~享保四年の間であろう。講義の筆記者は野田剛斎(玄厚)(元禄三~明和五)(一六九〇~一七六八)であるので、年齢から推測するに正徳期から享保のはじ

めと推測される。講義の題目は、『孟子』の「離婁章句下」で、主に為政者論を述べているくだりである。直方は、ここから藩主・正任に対して具体的に何をどのように語り、剛勝を登用した正任の様子はどのようなものであっただろうか。

○「艱難」のすすめ

まず直方は「大任治国平天下ノ事象ヲサスル人ニ所為何事ヲシテモツカヘテシニクシ」と、一般例として為政者に対して、家臣から働きかけ奉公するのは、何事も行いづらいつらいつらである。原因は専ら君主の人格にあるといい、話題は君主の賢慮を養うことに進んでいく。すなわち続けて「体膚ヲウマシテヲカス、艱難テ賢フナル」と、君主たるものには、甘やかさず苦勞させることを方法としてあげる。また、「生レ付艱難セヌ共カシコキカアルト云、生付カシコケレハ艱難スト、ナヲノ其生付ヨリヨクナル也」と、生まれつき聡明であつても、難儀・艱難を経て、より生来の性質を鍛えることになるという。これが君主となる人物に「艱難」を勧める理由である。

為政者への「艱難」が結果としてどのような君主を生むのか。直方は逸話を挟みながらさらに説明する。

保科肥後守殿、夜寝カネ玉ヒテ寝間ニテ自身トカクソノテ居玉ヘリ、或者云、チト御夜話ヲナガフト云、「ナルホド我モソフ思ヘ共、吾一人寝ニクヒトテ夜話ヲスルト、家中皆不寝、又者マテ旦那カヘラヌユヘニ不寝、スレハ己一人寝ニクヒトテ家中皆起シラクハ心ヨカラズ」ト、勝レタル御人ゾ。

保科正之の話である。自分が眠れないからといって、家臣を「夜

話」につきあわせると、陪臣までふくめた家中が迷惑する。だから、正之はひとり「コソノ」していたというのである。直方は、これを高く評価しさらに言う。

政ト云ヘハ、子細アルヤウナルガ仁義ノ政ト云モ何モイラス、
只人君ノ物ヲコラヘルト云ハカリゾ

君主の我慢が仁政の基本という。大名への「艱難」とは、このような「物ヲコラヘル」ことができる君主を養成することである。君主一人の我慢が最終的には政治全般、社会へ影響を及ぼすことを述べる。

此方テイノ忍ルハ其一事ハカリナルガ、歴々ガ一ツ忍ルト大ニ下ヘ廣カル、天下ノ君ヌシ、一ツコラヘルト天下中ヘヒ、ク、君ガスイテ為ラル、サヘ氣ノ毒ナルニ上ガコレカ御スキジヤト云テ如此シテハラカレマイト云テ、下カラナシ出スハ、大ニ火ヲ添火事ニ風ゾ、某ノ時代キレイリツハ好メルユヘ下夥敷修リ衣服ノ美麗ノ[■]ことナト何タルブヨケタル身ナルヤ、町人ノ下女シユス[■]ノ帯ヲス、雛甲ニ大金ヲ費ス町人ノ子ノナクサミニハ不屈也、天ヘ不仕付也。

上一人の志向や行動が下万民（社会）へ直に反映する。時に「キレイリツバ」を好む風潮は、一気に燃え広がる大火のように社会を包み込む。直方のこうした印象が、元禄期以降の経済的発達と都市の文化的エネルギーを背景にした時代感覚から導かれていることも理解できよう。

○正任の受け止め方

では、正任は直方の主張をどのように受け止めたのか。残念ながら藩主の実際の言動を直接伝える史料というのは多くない。ここでも二次的な門人記録に依拠せざるをえないのだが、稲葉迂齋の語りから様子をうかがうことにする³¹。

迂齋は、正任の性格を「何モカモ手ガルイ事デ」と評し、家臣への寛容な接し方をあげる。例えば、自分が庭へ出たときまたまたま合わせた中間は先に通してやる。自分と供人の間を人が割って通っても気にしない。こうして長島藩では遠慮とか閉門という処分を行わないが、それは次のような理由からだ」と正任の言葉を引く。

「ヲラガヨフナ小身ナモノガ遠慮閉門云付ルト、人少ナデ不自由デナラヌ、只訶テヲクガヨイ、引コマセテヲイタトテ直ルデモナイ。ソレハ大名ノ云事」ト云ヘリ。自ら以大名ニハララレズ。

迂齋をして、「大名」の気性でないという当人の寛容さが伝わってくる。「ツカヘテシニクシ」と直方が懸念していた藩主像の様子はみじんもない。直方が評した保科正之と同様の藩主イメージを正任に重ねることができよう。

以上、直方は直接的な事例によって「堪忍」を説き正任の藩主としての意識にたたみかける。目的は講義の内容の理解よりも、その先の実践にある。門人・正任に対して学問を実践し、家臣たちが快く奉公できるような藩主となることへの期待があった。そして「大名」である正任はどうやらそれを実現していたようである。

(三) 山中剛勝と天木時中の場合

○長島藩における山中剛勝

長嶋より度々書状参候、必相侍候段申来候。来ル廿一日、此元罷立長嶋へ参筈に候。：山中武兵衛儀頃日申遣候、気色弥快候ハ、罷上候様ニ可被成候。：長嶋へも武兵衛事如何と尋申候、為気分保養旅行可然事二候は、罷上り候様ニ致度候。(永井宛／享保三・九・十八)

享保三年の西遊中、直方は京都から江戸の永井に近況を語っている。そこから、八月二十一日に長島へ向かうつもりであることがわかる。そして、山中剛勝の様子を聞いて、病状がよければ江戸から上ってくるよう促している。

九月二十五日付では「対馬守殿学意不相替御懇情之趣、毎日二度罷出申候、可安御心候」(永井宛)とある。おそらく永井から聞いたのであろうか、江戸の正任が毎日二度の講釈に参加しているという熱心ぶりを感心している。正任の熱心さはそれ以降も続く。翌年の書状では「増山殿は、ハキトシタル處出来申候、武兵衛病身ながら無事ニ精出申候」(稲葉宛／享保四・一・五)とあり、正任の進展とその学問熱を剛勝が支えている。剛勝が、正任の学問指南役として藩内の位置を得ていたことが窺えよう。

武兵衛死去候後、其代りを被願候得共、山中氏程の学才も無之候、去年上方へ罷登候時節無程至り申候(長谷川宛／享保四・七・四)

ところが、病弱だった剛勝がほどなく死去してしまう。すると再び長島藩は代替の儒者を求めていくこととなる。こうした素早い対応が、直接的に正任の意志なのか、藩としての姿勢なのか詳細など

ころは図り得ないが、少なくとも剛勝のような儒者が継続して望まれていたことはいえよう。対する直方は、彼ほどの「学才」の持ち主はそうはいないと漏らしている。

○天木時中の招聘とその後

とはいうものの、剛勝に比肩する人物がいなかった。天木時中（元禄九〜元文元）（一六九六〜一七三六）である。時中は善六（門兵衛）といい、尾張国知多郡の百姓に生まれた。はじめ尾張の儒者・小出桐齋に学ぶ。のちに江戸へ出て直方へ、その没後は三宅尚斎に師事する。享保三年の段階の書状に、「尾州一学者」（稲葉宛／五・二十五）として話題にあがっている。

尾州智多郡農民天木門兵衛と申者も文字之才有之、玄厚一所に住居申候、重而東行被成候へば、大守御中屋敷より三四丁ノ間にて昼夜会談可成と珍重存候、一兩年之内御勤番願申候（長谷川宛／享保四・五・十六）

長谷川宛の書状では、時中を「文字之才有之」と評価し、いずれは「大守」の講釈役として出仕を計画している。ここには、直方の剛勝と同様、時中への期待をみることができよう。つまり藩に儒者として登用されることである。

享保六（一七二一）年、天木時中は正式に長島藩に招聘される。「承命創建講堂、座臯比講經傳、居五年辞仕而之尾」（『長島志』）とあるように、翌享保七年、藩領内に省耕楼と講堂が創設され、「臯比」すなわち儒者として講学を命じられる。その後、享保十一年までの五年間を長島で仕え、帰郷している。

たびたび引用している『長島志』は、時中の藩儒時代の様子を次

のように表現する。

近世自^二 大空公^二延^二佐藤三宅両先生^二尊^二信^二濂洛之学^二、人人稍知^レ尚^二程朱之学^一、家家挟^二小学近思録^一、士大夫家亦多^レ建^二祠堂^一者^上、当^二是時^一有^二火化之禁^一、其後以^レ不^二便^二于小民^一遂廢焉、噫、旧汚之俗有^レ難^二遽^二化^一者^上、但重望^二德^二風^一于上^二云云。

人々が宋学を知り、各家に『小学』『近思録』を備え、家中には祠堂を建て儒祭を行う者まで現れたらしい。家臣団らの学問への傾倒が読み取れる。また、葬祭法としての火葬を批判し、民間も巻き込んだ火葬制度の改変（俗の改変）を企図したことがわかる。それまで水害の多い長島藩領では、火葬が一般的であった。しかし享保十五（一七三〇）年の序をもつ『長嶋細布』にも「正徳の末より享保七八年の比まで停止也」とある。この期間の火葬中止に直方らの影響があったことが窺える。

実際には、「その後小民の不便を以てついに廢す」と定着には至らなかった。しかし、政策としてこの意味は大きい。火葬否定論とその実践は、仏教批判の論法の有力な一策である。ことに、長島門徒の勢力が継承される地域性を考慮するならば、大胆な転換であり、「俗」の教化という意味で、直方が理想とする「学者」の目指すところに他ならない。

さらに「重く徳風を望む」と伝えるように、火葬否定論の挫折によって儒学受容が途絶えたわけではない。次藩主・正武の代には唐崎彦明（正徳四〜宝暦五）を招聘している。唐崎は安芸竹原の神職の息子で、尚斎の門人である^⑧。このように引き続き直方の周辺から長島藩へ儒者の登用を見ることができるといえる。

○時中の認識

さて、直方が剛勝と同等の期待を寄せて、長島藩へ出仕した時中は、みずからの位置づけについてどのように考えていたのだろうか。

その意識を時中の『為貧説』³⁴にみよう。享保十三（一七二八）年、致仕した後に執筆されたものである。内容は題名のとおり、生業に汲々として精神・義理を疎かにするならば、貧に甘んじよというものである。しかしこれは、生業が主となり利潤追求に走ることの批判であって、生活を犠牲にすることではない。

抑、稼圃商賈等の業、之れを慮るべきは特に賤のみに非ず。学者其の事において、あらかじめ講習なし。急に臨みて其の業を遂創せんと欲する者、固より力任ずる所に非ざるなり。其の力の任ずる所は唯だ学を教えるのみ、その他に官を作る如きなきなり。

時中は、「道」の実現のため「学者」に餓死も辞さないことを要求するのではない。むしろ「学者」として教えることを生業とすべきだと言う。それは何よりも教導の技能をもって官途につくことである。藩儒として教育にあたる「学者」の像がはっきりと示されている。時中は直方が剛勝同様に期待した、藩主や藩士の教導役としての役割をもちや自明としている。直方が期待した儒者としてのあり方を実践したのである。

おわりに

実をいうと直方には出仕についてのルールがあった。『近思録』「政事」に収載された登用の話題がある。内容は上官のところに自薦に

やってきた役人の賛否をめぐって、程伊川は自薦を待つのではなく上官（君子）が「人を求める」べきとするものである。³⁵直方はこの意見を是とし、「下からかやうの人ありとて、上へせつくやうにはせぬといふ事也、下からせつくやうなればかならずあさむきがあるもの也」と述べる。「下からの」売り込みにある欺瞞を指摘しているのである。迂斎宛の書面でも、禄士の口利きを求め江戸へやってくる人々を「いな事はやり」とみる。³⁶すなわち人材の登用とは政治的上位者が行うべきと結論づけている。

直方は、同じ門人であっても、正任には藩主としての心構え、役割を期待し、剛勝や時中には儒者としての才能を評価し、出精を期待していた。そして、直方が意図した儒者登用のあり方を見ると、一つの構図がみえてくるのではないだろうか。直方門では門人相互の社会的立場を利用した学問普及の経路を構築している。

それを可能にするのは、各種の社会的成員を包含する存在としての門人という緩やかな範疇である。学問の場にあったのは、共通の学問理解、「学者」としての認識である。「朝聞道夕死可矣」の言説にみたように、それぞれに「道」の存在を示し、自己を揺さぶる。「道」の喚起は、個人を呼び止め、生き方の選択を迫る言説である。人々が生きる世界の意味と自己の生き方を模索するといった知的・精神的活動でもある。

こうした個々の内面の変革は、それぞれの活動の場に即して応用され、実践をもたらすことになろう。門人組織と社会的役割が合目的に連携する状況を作り出していたのである。この学派組織に、諸身分からなる儒者予備軍と藩主や重臣クラスまでを含むことで、儒者の育成と登用が円滑に進行する。学問（崎門学）を、政治体（藩）を利用して普及する様式である。それは学問が体制の肯定に終始するのではない、強かな一面をのぞかせているように思う。

最後に直方の門人に見られる、共通認識は一種の差別化の上に成り立っていると考えられる。前提となるのは十七世紀後半以降の書物による儒学の普及・受容によって一定の読者層が成立している状況である。この上でこそ、直方のいう「朝聞道夕死可矣」の標語が鮮明かつ魅力を帯びるのである。より高度な次元の思想を享受しようとする欲求に支えられているといえよう。直方門の活動は、こうした素地の上に受容の合理化・加速化を進めるものであった。

- (1) 横田冬彦「益軒本の読者」(横山俊夫編『貞原益軒―天地和楽の文明学』平凡社、一九九五年)、小林准士「近世における知の配分構造―元禄・享保期における書肆と儒者」『日本史研究』四三九、一九九九年。
- (2) 鈴木俊幸『江戸の読書熱』平凡社、二〇〇八年。
- (3) 十七世紀になって文学作品のパロディが多く現れるのも、著者と読者に「知」の「共通コード」が成立するという、出版文化による文化構造の変化があるという。(中嶋隆「パロディと出版文化―十七世紀日本文学を中心として」『中世文学』五三、二〇〇八年)。
- (4) 藤實久美子氏は、出版という契機を基準に近世の「知」の存在形態を「閉鎖系」「開放系」に分類した(『近世書籍文化論―史料論的アプローチ―』吉川弘文館、二〇〇六年)。この方法は近世社会の文化資本の「質」の一面に力点を置くものだが、難易度や専門性・通俗性というもう一方の「質」と必ずしも重なるものではないと考える。
- (5) 宇野田尚哉「十八世紀中・後期における儒家的知の位相」『ヒストリア』一五三、一九九六年。また、辻本雅史は十九世紀の爆発的な教育の進展の前提として、十八世紀後半をその始動期として捉えている(『近世教育思想史の研究』思文閣出版、一九九〇年)。
- (6) 黒住真「儒学と近世日本社会」(『近世日本社会と儒教』ペリかん社、二〇〇三年)。

- (7) 後掲するように門人三名との書状であるが、いずれも『韞蔵録』『韞蔵録拾遺』のもので、古典学会編纂『増訂・佐藤直方全集』(ペリかん社、一九七九年)所収である。
- (8) 長谷川源右衛門家は、初代・遂能―二代・遂直―三代・遂明(克明)―四代・思誠。初代・遂能は寛永十二年に家老、島原・天草一揆の鎮圧軍にも加わり、万治年間には四五〇石。その後、知行分けを行ったらしく本家・源右衛門家は三〇〇石、天和三年段階で、三男・遂住の一五〇石が確認できる。(『万治元年戊戌年 松林院様御代分限帳』『従古代役人以上寄帳』ともに『大河内家記録』東京大学史料編纂所蔵)

- (9) 「與長谷川克明手帖」(『韞蔵録拾遺』卷之十一)
- (10) 「與永井行達手帖」(『韞蔵録拾遺』卷之十二)
- (11) 「與稲葉正義書十通」「與稲葉正義手帖」(『韞蔵録』卷之六)
- (12) 直方の生涯については、田中謙蔵「佐藤直方先生」(伝記学会編『山崎闇斎と其門流』明治書房、一九三八年)、吉田健舟・海老田輝巳「叢書・日本の思想家 一二(明徳出版社、一九九〇年)の略年譜を参照。また直方の思想論については、田原嗣郎「赤穂四十六士論―幕藩制の精神構造」(吉川弘文館、一九七八年)、田尻祐一郎「赤穂事件と佐藤直方の「理」」(『日本思想史研究』一八、一九八六年)、若尾政希「太平記読みの時代」(平凡社、一九九八年)など、近世の法制度や武士的エートス、政治意識などとの関連で論じられてきた。
- (13) 本稿中の書状の宛先および年月日の表記は(宛先/年号年 月 日)に統一している。
- (14) たとえば永井宛に来訪を知らせる中で「其元へ参候儀、六日七日八日の中くり合可申候、四日ニ大学講会可申承候」(享保二 四 一)とある。「講会」はあくまで師の講釈を前提にしている点で、「不特定多数の無縁の大衆に説く」(辻本雅史「マスローグの教説―石田梅岩と心学道話の「語り」―

『江戸の思想 五 読書の社会史』ペリかん社、一九九六年」という道話とも、「自主的な「討論」を主とする理性的了解の方法」(前田勉『江戸後期の思想空間』ペリかん社、二〇〇八年)という「会説」とは質的に異なる。(15) 辻本雅史「日本近世における「四書学」の展開と変容」(『季刊日本思想史』七〇、二〇〇七年)。

(16) 出発の前の手紙の一部に「五六十日之中、皆々講会近思録下見、語類など講習講学の怠りも成申間敷候、留守中ニ精出受教之地こしらへ置候も却而進歩之方ニ成可申候」(永井宛／七月十日付)とある。

(17) 永井宛／九月十八日付、および稲葉宛／九月十七日付。

(18) 「幕府日記」では守屋をはじめとした代官の処分は六月十二日付で言い渡されている。

(19) 加藤清左衛門主令、加藤大貳の弟で庄内藩家老となる。

(20) 前掲、注十二、田中論文によれば、稲葉迂斎・野田剛斎・永井隠求の三人は、門下でも傑出した人物であつたらしい。

(21) 『四書便講』「論語・里仁」(前掲『増訂・佐藤直方全集』)。

(22) 『孟子』公孫丑章句上／万物生々流行の貌、天の和氣を指す。

(23) 「曾點之学、蓋有以見^レ其^レ夫^レ人欲^レ其^レ処、天理流行^テ随^テ充^テ無^クト^ラ少^シ欠^ク、故^ニ其^レ動^静之際、從^テ容^如此^ノ」(『論語集註』先進第十一)。

曾點は、曾參(曾子)の父で、孔子の弟子の一人。

(24) 「所謂聞者通^{シテ}凡^ニ聖^ヲ而言不^ニ專^ニ謂^ハ聖^賢然^{シテ}大率是為^ニ未^ク聞道者^ノ一^ツ設^ケ」(『朱子語類』卷第二十六)。直方は、この部分を『四書便講』(元禄五年刊)の中でも引いている。

(25) ここでは、自己を他のものと区別する意識を「個の自覚」と呼んでいる。その具体的な対象や内容については今後の課題としたい。

(26) 五代藩主・正賢のときに仕えた儒者・十時梅屋が編んだものとされている。明治四十一年、当時長島小学校の校長である矢澤金秋が、虫害の甚だしい本書を発見。「本校沿革而及「維新前之学事」とするため、師である秋山断

(旧桑名藩儒)に相談。「謂此旧藩士之家必有藏之者」と、旧藩士の家に写本があるはずだから、探索と校合を勧めた。矢澤は福原・久我の両家に発見し復刻する。旧藩主家に知らせると喜ばれたという。矢澤が、十時のものとした理由は、頁ごとに捺された「梅屋藏」の印と、筆致の酷似である。

(27) 永井宛／享保二、十二、五

(28) 祖は青木利長。利長の父の代、天正年間に北条氏に滅ぼされ流浪。下野国高島村に住居。利長の長子・正利もはじめは青木を称した。母方は増山織部の女紫。正利の姉が四代將軍家綱の生母・お楽(宝樹院)である。

(29) 長島藩については、伊藤重信『長島町誌』(長島町教育委員会、一九七八年)。

(30) 『韞蔵録続拾遺』卷之二、前掲『佐藤直方全集』所収。

(31) 稲葉迂斎講述『浜見録鈔』(寛延二年ごろ成稿)。筆記者は「邨士宗章」なる人物。

(32) 国会図書館蔵、享保十五年成、伯黄堂宗磨(八幡社神職、伊藤定照)による地誌。

(33) 前掲『長島町史』。

(34) 享保十三年跋。『日本経済叢書』十七にも収載。

(35) 伊川と韓維、范純礼の逸話。

(36) 『韞蔵録拾遺』卷之十。元禄十三年講述。

(37) 享保二年九月二十日付。

(38) 横田冬彦「三都と地方城下町の文化的関係―書物の流通を素材に―」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一〇三、二〇〇三年)。

〔学外研究者による査読を含む審査を経て、二〇一〇年七月二十三日掲載決定〕(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)